

▼第 3 期・エニアグラムアソシエイツ養成講座を終えて

(2024/8) YS

○20年待ちの講座？

中嶋先生は本を出されており著者として以前より知っていた。本も何冊も持っている。約20年前に、とあるセミナーにてゲストといらっしやった時にお会いした時が最初で、今でもよく覚えている。といっても一方的に知っているだけの遠い存在であった。

また、十数年前に南青山のサロンに1度だけ参加したことを思い出した。まだ20代でお金もなかった頃だったから、通いたかったけど通えなかったという思いもある。

それから随分たって、コロナが5類に変わって落ち着いたころ、新刊を出版すると知りうれしくなった。海外の本を参考にされて書かれている著者も多い中、先生はご自分の切り口で書いている方だと思っていたからだ。西洋人と日本人は、文化や宗教、また個の捉え方が違う。自我を扱う学問であれば、日本人としてご自身の言葉で書かれているエニアグラムの本が読みたかった。

そんな遠い存在の中嶋先生が、養成講座を始めるというのだから、どんなことをやるのか、どんな切り口なのか、心待ちにしていた。

また、改めて先生への感謝もある。あれから20年も経つのに、先生のエニアグラム熱は冷めていない。新しく本も出して、新しく講座もやる。ずっとずっと探求し続けて下さっているおかげで、こうしてまた学ぶことができる。

○「体系的」に学べる！？

講座紹介の冒頭に「体系的に学べる」とあった。これは、とんでもない講座がくるなと思った。そう、過去の著作を読んでいる私としては、先生のいう「体系的」という表現には自分なりの解釈があるからだ。これは先生が何か仕込んでいるに違いない。

○徹底的な横軸の比較

私が「体系的に」という言葉に反応した理由の1つとして、先生のエニアグラムへのアプローチの仕方が挙げられる。著作の中で私が一番好きなのは「9つの性格と45の相性」である。この本は20年以上前に出版された本だが、私が誰かにエニアグラムを説明する際にはいまだ現役だ。それだけ完成されている。

また、どれだけコピーして配り倒したことか（すいません・・・）。そしてどれだけパクって自分が説明する時に使ったことか（すいません・・・）。この本だけは3回買い直しているのも大目に見て頂きたい。つまり合計4冊。4冊ですよ。

では、この本の何がすごいのか。それは9つのタイプを同じ軸で、横並びで徹底的に比較をしていること。いや、もうこの本で完成形じゃね？もうこの1冊でいいんじゃない？、というくらいわかりやすい。

よくあるまとめ方として、各タイプの長所・短所などの比較などがある。横並びとは全タイプの長所と短所すべて洗い出しているということ。でもこの本は、そんなありがちな抽象的な比較では終わらない。

例えば、恋愛を扱うと、最初は各タイプが求める愛情の定義から比較が始まる。その比較のテーマは恋人同士の時の関係になり、そしてその後の関係性が続いてから生まれる葛藤になり、さらに結婚してからの問題に及ぶ。おいおい、時系列で変化しているじゃないか……。

恋愛というテーマで食いつかせておいて、その後の流れまで展開していく。最初はドラマチックに始まっているけど、後半のページでは夫婦関係まで扱っており、タイプによっては、離婚ギリギリの泥沼寸前だぞ。リアルだ、すごい、すごいぞこの本。女性にモテないタイプの私が、このページだけ酷使し、どれだけ職場の女性の気を引くのに使ったことか（だからこそ3回買い直した訳ではない）。

しかも、こういった比較を、全てのタイプで同じシチュエーションで全部横並びで比較説明している。部分的にやるのではなく、全タイプを完全にコンプリートしている。もちろん恋愛以外のオールドックスなものを押さえてある。職場で起きる上司と部下の関係性の想定など、日常のあらゆる場面が網羅されて落とし込まれている。

この著作の構成こそが、中嶋先生の「体系的」を体現しているし、私が期待しているところでもある。

○理論の裏付け

エニアグラムをこういった横並びの比較で、表形式で埋めていくようにまとめると、必ず壁にぶつかるはず。そう、どうしても埋まらないところが出てくる歯抜け問題が発生する。様々なテキストを寄せ集めても、歯抜けにしかならないし、量だけではカバーできず、情報の質がバラバラになってしまう。

こうした歯抜け問題が出た時に問われるのが、どれだけ体系的にエニアを理解しているかだろう。根本にある理論をどこまで深く理解しているか。空白の部分埋めるには根元的なところを押さえないと、どうしても進まない。基本を押さえて応用できないと、説明がし切れない。

全体網羅のために表形式から始め、さらに言語化し、さらに日常のシチュエーションに落とし込む作業は、気が遠くなる。そして根拠となる理論だって、丁度良い文献や根拠が簡単に転がっている訳ではなく、調べたからといってすぐに見つかるものでもない。理論の原典を辿り、またそれを理解するまでの苦労は相当な道のりであったと思う。

○知見の広さとブログ

また先生は知見がとても広い。最近出版された本の参考文献をみてもそれがよくわかる。引用文献の豊富さ。海外の文献もあれば、30~50年も前に出版されている心理学の本まである。(読みたいのに Amazon でもヤフオクでも激高か、絶版もあるし、参考文献が参考にならないじゃないか!と言いたくなるほど奥が深く広い) 先生が読んでいる本を読んでみたくて、ホーナイの原書に手を出してみたり、英語ができないのに洋書に手を出してみたりしたこともある。当然玉砕した。頭から煙が出て、心がポキっとってしまう。

自分が欲しい情報がそのままの形で落ちている訳がない。見つけるだけでも、集めるだけでも苦労するのに、それをガリガリ噛み砕き、消化して、日常のリアルとして表現している。

また表現の場はそれだけではない。過去のブログの量が尋常ではない。著作もよいのだが、ブログはまた違う意味で興味深い。本などの商業的な出版ではいろいろな制約がある分、ブログではそれなりに自由に書いてらっしゃるのかとも思う。

リソとラスの著作で、まだ邦訳されてないけど、実はとても重要なところは先生がブログで書いてくれている、と私は勝手に解釈して読んでいる。何気なしに読んでいると、ものすごい重要なポイントがでてくることもしばしばある。海外のエニア界隈の最新情報にも触れてらっしゃるから、とにかく守備範囲が広い。

ちなみに先生のブログを自分用に印刷した結果、とんでもなく分厚くなった・・・。もはや少年ジャンプのようになっている。思ったより重いし・・・。もっと縮小すればよかったと

思ったと同時に、あれ？これは本買わなくていいんじゃない？と思ってしまったが、まあそれくらい内容が濃いということだ（すいません・・・）。

というわけで、妥協なき横軸の徹底的な比較、執念の理論の裏付け、海外を含めた果てなき文献への知見、これらをもって「体系的な養成講座」を提供するというのだから、期待せずにはいられなかった。やっと発信してくれるのか、先生。遅いよ！待ってたよ！と本当に思っていた。

○理論の種まき

この養成講座が終わるころに何が起きるか？そう、エニアグラムに関する基本的な理論の種まきが全て終わる。ただ、すぐには結果でない。そう種だからね。でも、まかなければ収穫もない。そしてこれは一人ではまけない。正しい導き手がいて、仲間がいて、協力しなければまけない。先生、20年以上前からこの畑を耕してくれてたんですね。

○生きたエニアグラム

ここで私の上司の話。私の上司はエニアグラムに興味をもってくれた数少ない一人である。そもそも、当人は会社では人道掌握に優れ、他部署の年長者からさえも一目置かれる存在。人の観察眼には定評があり、説得はお手の物、さらに交渉事をやらせたら右に出る者はいない。相手の心理状態を引き出し、鋭く見抜ぬける、そんな上司だった。

この上司にエニアグラムを伝えるのに、数年を必要とした。私の伝え方はお世辞にも上手いとは言えないこともあってか、最初は疑っていたし、相手にもされなかった。とはいえ、もともと洞察に長けているから、興味をもって覚えだしたら速かった。

自分が過去体験してきたものを、裏付ける作業をしているようだった。知識が加わって、さらに鋭さを増した。自分の中で体験してきたことが、理論で裏付けされて、整理されることによってより確信に至っているようだった。曖昧で掴みどころがない人の心理を掌握するのが得意だった上司は、よりその能力に磨きがかかったようだった。

ただ、時に度々、学びが停滞した。そして理解がとて深いところと、そうでもないところとでてきた。なぜか？そう、基本的な理論を押さえられていないからだ。

よく漫画であるやつだ。ケンカをさせたらヤバイ不良が、ボクシングをやって更生していく。でも最初はボクシングをやっている優等生に技術の面であっさりやられてしまう。でも、

そんな不良にボクシングのスキルを身に着けさせたら、それはとんでもない強さになる、そんな人だった。

そこで私は、センター、ホーナイ、ハーモニクス、この3つだけを理解してもらうことにした。この野生的な観察眼と、自力で養った人間関係の持論、理論を中途半端に説明しても受け入れてくれない。頭でっかちにしか聞こえないからだ。

説明は難しかったが、話せる時間だけはあったし、そもそも本人が人間力の高い人だから、最初は嫌がっていた理論だったが、ものにしていってくれた。その後、いつだったか「なんで重要なことを先に言わないんだ」といわれたが、それは彼が私に伝えてくれた感謝の言葉だったと思う。

それからは何気ない会話に「あの人は合理タイプっぽいな」とか、さりげなくホーナイが登場したりする。野生の観察眼で培った経験と理論が加わった時、あまりの分析の鋭さに舌を巻くことがある。テキストに書いてあることを知らないはずなのに、それに近いことを言うてくるのが度々あった。

この時、私は思い知らされた。エニアグラムは生き物であり、理論はこうして目の前の人間観察と合わせて使っていくものだ。同時にこの理論を理解してなければ、どれだけ人間観察に長けていても、一個人としての観察眼など、限界があるものだ。エニアの理論が彼の観察眼を一気に飛躍させたに違いないし、エニアグラムを伝えたつもりが逆に私自身が体験から来る生きたエニアグラムを教えてもらったとも言える。

○先生とみんなと種まき

ここで話しは戻る。そう、この講座が終わるころには、様々なエニアの基本的な理論の種まきが終わる。そんな欲張りな講座になっている。

理論はやっぱり難しいが、この講座では理論を体験的なワークとして経験する。体験的にワークするという機会は、意図しなければ人生では訪れないであろう。まして一人では絶対にやらないし、やれもしない。でも上記の事例のように、理論があればこそ人生で起きる人間関係は格段に深まっていき、自分の経験がもっともっと活かされる。

そして、半年という期間は参加者同時、お互いの中が深まってくるからこそ続けられる。継続する励みにもなってくる。

同時にお互いのキャラクターが割れてくると、今度は比較材料としての役割を互いに提供することになる。性格というのは、自分だけをいくら探求しても、途中で理解が深まらない

くなる。わからなくなる。そんな時、異なる性格と触れて比較してこそ、お互いの性格の輪郭がより明瞭になっていく。

また、自己探求の場はフラットな環境であることも重要だと思う。参加者同士には何の関係性もなく、上下関係もなく、利害もなく、ただ素の自分を出せる場所。そうでなければ素の自分を感じ、気づき、体験することはできない。

会社でも家庭でも、関係性がある以上、役割としての性格という自分が存在してしまう。この講座の中だけでも、それが無くなり、ただ純粹にエニアグラムという理論を使い、何の色付けもない自分を掘り下げていく機会になる講座であったと思う。

中嶋先生はうってつけのナビゲーターであり、「体系的な」導き手として最良の先生ではないだろうか。

○最後に

ただ、一つだけ不満(?)があるとすれば、先生が本領発揮できてないこと。種まきの講座は絶対に大切だ。けど、種を育てる講座も、実を収穫する講座も、先生はやりたいんだろ。そう思うと、もっと種まきに参加していくアソシエイツが増えていくことを、心から願って止まない。

20年以上も前から探求をし続けて下さっているおかげで、今の私たちの探求の道が開かれている。その地ならしをずっと前からやって下さっていた。出版を通し、ブログを通し、サロンを通し、継続されてらっしゃった先生に敬意と感謝を伝えたい。

エニアグラムに出会った頃の私は、生きていくことに前向きになれない自分だった。それがきっかけで学んでいくことになるが、それは姿や形を変えつつも、私が一生背負っている課題なのだと思う。エニアグラムに頼りながら生きるその道すがら、先生の本がどれだけ助けになったかわからない。

そんな先生と、今こうして一緒に種まきができ半年はとても楽しかった。真澄先生、ありがとうございました。

▼吉野賢さん

○「聴く」という姿勢

「聴く」という姿勢を教わったと思う。相手の言っていることを理解するだけでなく、受け容れる姿勢。仕事でも家庭でも、すべての問題のベースは人間関係にあると思うが、聴くことができないと始まらない・・・と頭でわかっててもなかなかできない。

エニアグラムのセンターで言うなら「聴く」という姿勢は、子供のお遊戯会を見に行く親に近いものがあるのかもしれない。

子供がうまくできているか、きちんとできているかというのは思考での判断。親はそんなところは見えてない。できてても、できてなくても関係ない。そこに評価などない。ただ、一生懸命な子供を見守っている。泣いても、失敗しても、全てOK、受け入れている。それが感情センター。

でも同時に子供が感じているドキドキや、プレッシャーや、体のこわばりも、ワクワクも、一緒に体で感じている本能センター。親が子供を育てる姿勢の中に全センターをもってして「聴く」という姿勢あるように思う。

このような「聴く」ということの質を短い時間とはいえ感じさせて頂いたように思う。大げさだろうか？そんなことはない。日常的にコーチングやコンサルタントとしての活動をされていらっしゃる方だからこそ、半年間の講座や1対1のコーチングセッションの時間で、感じさせて頂いたと思う。

平素、会社社長や社員幹部を相手にし、人間関係という掴みどころがなく、そして解決の着地がないことのほうが多い。そんな環境に身を置かれている。その環境下において理屈で割り切れる頭だけでの「聴く」姿勢では通らないのではないかと。納得されないのではないかと。

子供のお遊戯会には例えはしたが、職場ではそう簡単にはこの姿勢は貫けない。とはいえ、「聴く」という姿勢は、人間関係の基本として身に付けていくベースとなるであると思う。

だからこそ、自分が一度やってもらって、体験しないといけない。自分が受け取ったことがないものは、人に渡すことはできない。

自分は、相手に関心を向け、肯定し、判断せず、話を聞いてあげる。感情が収まり、頭も冷静になり、整理される。こわばった身体も弛緩する。この姿勢を会社で10分でもやってあげたことがあるのか？

それどころか、真逆をやっていないか。相手に無関心で、否定し、判断し、説教して混乱させる。恥ずかしくなってくる。吉野さんがうちの職場にいたらどうだろうか？どう振る舞うのだろうか？そう思えるのは、マネできたらいいなと思わせるその姿勢と、そのお人柄だろう。

○モデルの一人

講座のサポート役であり、人に安心感を与える傾聴が自分もできたらいいな、と思わせて下さったコーチングに感謝している。人という動物は、実はシンプルなもので、マネしたいなというモデルがいくつあるか、実際に体現している人のリアルをいくつ見たことがあるかというだけではないか。その意味で吉野さんは「聴く」というモデルの一人と思う。

▼大久保純子さん

○日常あるある

純子さんのコメントは入ってきやすい。なんでだろう。そうか「日常あるある」に結びついているからだ。

理論を扱う講座はどうしても、言葉での説明や思考での理解になる。どうしても必要な作業だが専門用語になると、すごい当たり前で、普通に日常に溢れていることでも、理論が自分の体験と結びついてくれないことがよくある。

「ハーモニックと〇〇で、・・・楽観型はXXで・・・」。うーんと、えーと、頭が追いつかない時がある。たまに訪れる Now roading 状態。あ、〇〇さんが、読み込み中になっている・・・。顔面が半分フリーズしてるぞ。

そんな時、じゅんじゅんさんの日常あるあるのコメントが飛び出す。それを聞き終わると、「あー、はいはい、あの瞬間ね、あるある、確かにある。昨日そうだったわー」と、理論と体験がぱっと結びつく。ナイスタイミング。講座のところどころで、日常へリンクさせてくれる。自然に体験知にもって行って、理解を深めてくれる。

エニアを肌で感じてもらうにはどうしたらいいか？と考えた時、大久保さんの「あるある話」は肌感覚に落としていて違和感がない。なじみやすい。

難しい言葉に限らず、各自の理解や整理が必要なタイミングや、間というものがあるが、そこで先に発言して調整したり、他の受講者の皆さんの考える時間を稼いでいたり、たまに突っ込みの合いの手いれたり。至るところに目を配られているのがわかる。

○講座の運営力

この講座ではエニアをどう伝えていくかという点もテーマとしてあったし、運営するという視点から大久保さんの配慮や振る舞いに気づかされる部分が多かった。

理論を体験的にするためにはワークはどうしても必須だが、参加者全員に予備知識がある訳でもなく、また目的も関心も一緒ではない。

そんな中で足並みを揃え、理解不足が起きないようにする。こういったいろんな課題がある中で成立させるには、お互いのコミュニケーションのしやすさや、雰囲気作りが大事になる。その点で、全体をみて観察して、空気をうまく調整されていたように思う。

人はそこに一緒にいる人に自然と感化されるものと思うが、大久保さんの明るいキャラそのものが、講座をより良い雰囲気にされているのは間違いない。 (以上です)